

# 伝統ある流派を後世に

## 茶道の古文書を現代語に訳す

六十三歳になった時、思い立って家に伝わる三百余年前の茶道の古文書の解説に取り組み、八年もの歳月をかけて一冊の本にまとめた仙台市清水小路一に住む大泉淑子さん。その本の表題は「清水動閑註解 石州流三百箇条一付・仙台湾茶道」カバリー張り、四百円で箱入りという立派なものだ。

石州流十世の宗匠 大泉さんは、石州十世より、三世通年の時、石州流の回遊式庭園を造った人との名を持つ宗匠。仙台湾 清水派を正式に名乗った。して有名。

## 八年かけて自費出版

育成があつて石州流が広まったが、その後次第に衰え、大泉さんが仕事の都合で仙台から離れたことなどもあつて、石州流を知る人が少なくなつた。

作法もごく簡単

住む東北大名督教授佐川修さんが資料の解釈などを習った。当然のこととして、仙台市博物館や宮城県図書館へ出向き、さらに東北大学図書館、東北歴史資料館、斎藤宗会自然史博物館なども回った。仙台だけでなく、東京の国立国会図書館や国立歴史資料館などにも足を運び、慎重に資料を照会した。

が敬遠されるのでしよう。しかし私は、石州流は自然な品であり、作法もごく簡単で、そのうえ上品ですので、これに伝統のことなど加味すると仙台の人たちは一番いい茶道だと思ひますが」と大泉さん。

多大な費用がかかる

六十を過ぎた時、大泉さんは考え、このままでは十一世を名乗らせるにしても、同時に代々伝わる石州流の古文書の現代語訳を付けてやらなければ、ますますその存在の意味が薄くなる」と。

ただ「子供たちの恋愛があつてうれしかった。お金のことはとにかく、一冊の本を手にした時、こしを強しておけば、石州流はいつまでも後世に残ると思ひ、喜びが内からわいてきました」ととは笑ふ。

## 専門家を訪ねて 解説の基礎学ぶ

八世まで代々清水家で同派の宗匠を受け継いできたのだが、九世に大泉さんの実母（養母）が選ばれ、この後、母から娘への伝授となつたという。旧藩時代は藩主のひ孫、

大仕事を成し遂げた大泉淑子さん



大仕事を成し遂げた大泉淑子さん